

令和3年度 第2回総合教育会議 議事録

日時：令和3年12月17日（金）14：00～16：00

場所：佐世保市役所5階 庁議室

出席者：朝長佐世保市長、西本教育長、内海教育長職務代理者、萩原教育委員、古賀教育委員、松野教育委員

事務局：松尾総務課長、杉本社会教育課長、中尾図書館長、高島学校教育次長兼学校教育課長、副島総務課長補佐

【議事録】

【松尾総務課長】

定刻となりましたので、ただいまから令和3年度第2回総合教育会議を開催いたします。

皆様におかれましては、大変お忙しい中、ご出席を賜り、誠にありがとうございます。教育委員会総務課長松尾でございます。

市長に議事進行を行っていただくまでの間、私のほうで進行をさせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。

会議に先立ちまして、まず、本日お配りしております資料の確認をお願いいたします。

一つ目が冊子になっております第三次佐世保市子ども読書プラン、緑色の表紙の冊子でございます。

二つ目に、右上のほうに第2回総合教育会議（社会教育課）と書いている資料、読書活動の推進に係る社会教育課の取組、左上のほうで1枚綴じてある資料でございます。

そして、青色の表紙のA4横向き、図書館事業説明と書いた資料でございます。

それから、右上のほうに学校教育課、左のほうにタイトルがありまして、第三次計画の重点施策の数値目標に対する実績、それから最後に、右上のほうに今日の日付2021年12月17日、令和3年度第2回総合教育会議資料と書いた上下にスライドを写した資料でございます。

皆様、お手元のほうに資料はございますでしょうか。

それでは、ここで会の主宰者であります朝長市長よりご挨拶をいただきたいというふうに思います。

【朝長市長】

皆さん、こんにちは。着座のままご挨拶させていただきます。

本日は、大変お忙しい中にお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。ありがとうございました。

特にコロナ禍ということでございます。佐世保の場合には、ここ1か月ほど感染者ゼロということでございますが、新しいオミクロン株が蔓延し始める可能性もあるというようなことで、少し戦々恐々とし始めているところでございます。しかし、町なかも今のところ非常に落ち着いております、人出も通常に近い形に戻ってきているんじゃないかなと思っております。

また、学校のほうも、それぞれ小中学校におきましても、落ち着いて今は授業ができていないんじゃないかなと思っております、この状況がずっと続いていけばいいなと思っているわけでございますが、これからどうなるのか非常に分からないところでございます。しっかりとワクチンの接種をしていただきながら、そして、3回目のワクチン接種ももう始まっておりますし、高齢者に関しましては、1月から、逐次3回目のワクチン接種をしていただくような計画をつくっておりますので、またご協力いただくことができればと思っております。よろしくお願いを申し上げたいと思います。

日頃から、この教育行政につきましては、皆様方に大変ご尽力をいただいております、大変ありがとうございます。

総合教育会議につきましては、市長と教育委員会の皆様方の考え方を調和させながら、有効に活用していければというようなことで開催をさせていただいているところでございます。

これまでも総合教育会議の中で出てきたことにつきまして、実行させていただいていることでございますし、また、議会のほうからもいろんな質問いただきまして、市長と教育委員会とでちゃんと協議しながら進めているよというようなことを言えるようになってきておりますので、総合教育会議は非常に大事な会議であると考えております。今後ともよろしくお願いを申し上げたいと思っております。

さきの12月の定例市議会におきましても、教育に対する関心の高さを示すように、市議会質問者の中で7の方が質問をされました。

内容は、小中学校の新たな3学期制、来年4月から始まるわけでございますが、3学期制のことにつきまして質問があつておりましたし、また、学校再編のことにつきまして、まだ教育委員会としては、今のところ素案の素案というような形で提示をしたつもりですが、かなり真剣に捉えていらっしゃる部分もあるようでございまして、これは最終の形じゃないんですよ、ありきじゃないんですよというようなことを説明するのにかなりご苦労されたところもあるようで

ございますけど、市議会の先生方も非常に関心を持っていらっしゃるということではないかなと思っております。

また、青少年教育センターの在り方につきましてもお話がございました。これも、今までの在り方とは、時代の変遷とともにいろんな流れが変わってきているんじゃないかということで、青少年教育センターの在り方、あるいは建て替えの問題等につきましても、議論があったところでございます。

そしてまた、児童生徒の通学費の負担軽減に関する質問など、幅広く質問が出てきておりました、教育委員会としても一定の回答をしていただいたところでございました。

また、このような教育行政につきましては、常に市民の皆様方から注目を集めるものでございます。と申しますのも、教育に関しては非常に、それぞれ皆さん見識を持っていらっしゃると思います。100人いれば100通りの考え方があってもおかしくないと言われるようでございますし、また、百家争鳴というようなこともございます。

そのようなことで、教育に関しては皆様それぞれ思いがあられますので、それを一定の方向に集約していくことは大変なことでございますが、これも教育長そしてまた、教育委員の皆様方が、それぞれの意見を集約しながら進めていくということになるんじゃないかと思えます。そこに市長としての、行政としての考え方も入れさせていただきながら方向性を定めていくことが重要じゃないかなと思っております。

本日は、読書活動の推進についてというテーマについて、意見交換をさせていただくということでございます。

最近、子供たちの読書離れということが言われておりました、非常に各方面からご指摘もされております。これも、いろんな理由があると思えます。

SNSやインターネット、そしてまた、読書に集中できないような様々な子供たちの遊びもあるでしょうし、それから、テレビもございますし、スポーツもございます。

私どもが子供の頃は限られたことしかなかったので、そこに集中することができたんじゃないかなと思えますが、今は何でもやろうと思えば、やれるようなことでございますので、子供たちが読書だけに集中できないような、そういう時代背景もあるんじゃないかなと思えますが、しかし、それをどういう方向で集中をさせていくか、これに指導者を持たせるかということは、非常に難しい課題でございますけど、やはりこれからの子供たちの成長、佐世保や日本国の将来を考えたときは、しっかりと読書をさせていくことが必要じゃないかなと思っております。

このような状況の中でございますが、佐世保市として、読書活動の推進につい

てを今回のテーマとして、それぞれ専門のお立場からお話をお伺いすることができればいいんじゃないかなと思っております。

本日は短い時間ではございますけど、次の世代を担う子供たちのために、また、今後の佐世保の教育のさらなる発展に向けまして、有意義な会議となることを期待しておりますので、よろしくお願いを申し上げたいと思います。

以上、簡単でございますけども、冒頭のご挨拶に代えさせていただきます。ありがとうございました。

【松尾総務課長】

ありがとうございました。

それでは、議事に入らせていただきます。

ここからは、主宰者であります朝長市長の進行でお願いいたします。

【朝長市長】

それでは、ここから私の進行で、会議を進めさせていただきたいと思っております。

本日のテーマとしては、読書活動の推進についてということでございます。

まず、佐世保市における読書に関わる計画と状況等についてということで、事務局より説明を受けたいと思います。

佐世保市における取組、どのような形になっているのか、それぞれの担当の部課、部門がございますので、こちらの、教育委員会の事務局から説明をしてもらいたいと思いますので、よろしくお願いを申し上げます。

まず、杉本課長のところからお願いいたします。

【杉本社会教育課長】

それでは、社会教育課関係の取組について説明いたします。

資料は、右上に、第2回総合教育会議（社会教育課）と書いております資料です。

読書活動の推進に係る社会教育課の取組の資料はございますでしょうか。1ページ目をお願いいたします。

ここでは、子ども読書プランの策定について、そして、家庭・地域における読書活動の推進についての大きく2点について説明いたします。

まずは一つ目、子ども読書プランの策定でございます。

本計画は、平成13年12月に施行されました子どもの読書活動の推進に関する法律に基づきまして、平成22年3月に第一次、その後、平成27年3月に第二次計画を策定、その後、令和2年度から5か年計画として、現在、第三次計画がございます。

お手元の若草色の冊子はその計画になります。

その計画の35ページをお願いいたします。

A3サイズで政策の体系がございます。左上に記載のとおり、子供が読書を通して幅広い知識を身につけ、感性豊かで人間性あふれる子供に成長することを願って、子供が自ら本に親しむ機会の創出と読書環境の整備充実のための方針及び具体的な施策について明記したものになっております。

そして、その下にあります「めざす子ども像」としまして、本との触れ合いを楽しむ子、本から学び、知ることの喜びを感じる子、そして、本で得た知識を生活に生かし、自分の考えや思いを伝えることができる子を掲げ、子供と本をつなぐ環境整備、人材育成、連携等の4本柱に対しまして、その取組の主体、対象として、家庭・地域、幼保、学校、図書館、ボランティアを位置づけ、横串を刺すように記載しまして、関連する課が横断的に施策を展開することとしております。

この中で、社会教育課関連で展開しているものが、一番上の家庭・地域の横串の部分となります。本計画では17ページからになります。

17ページをお開きください。

それでは、ここからは、家庭・地域における読書活動の推進について、現状の取組を説明いたします。

それでは、先ほどの紙のほうの資料の1ページをもう一度お開きください。

まず、家庭における読書の推進としまして、家読講演会の開催を行っております。

これは、保護者に本の魅力と本に親しむことの大切さについて理解を深めてもらい、本を身近に感じる家庭環境の醸成につなげるために開催しており、家読10分間運動の推進に係る啓発として開催しております。

毎年1回、学校図書ボランティアネットワークさせぼとの共催事業として開催しております。

過去の開催実績につきましては、次のページ、2ページ目に記載しております。

例えば、平成28年度は、絵本作家のにしむらかえさんに「いえで読む絵本作家の見た世界の家読」というテーマで、前半は親子でのワークショップ、後半は大人を対象とした講演会という二部構成で開催し、また、昨年度は、コロナ禍の中で人を集める形での研修を何度も開催するのが難しいということがございましたので、県の生涯学習課と共同開催としまして、佐世保在住の童話作家、新井悦子さんを講師に「子どもの本に込める思い、童話作家・母・図書ボランティアとして」というテーマで、絵本を通した子供たちとの触れ合いについての講演会を開催いたしました。

今年度は年明けの2月に開催予定で、現在、学校図書ボランティアネットワークさせぼさんと準備を始めたところでございます。

続いて、家庭での読書の推進として、新1年生入学説明時のブックリストの送

付がございます。

資料3ページ目をご覧ください。

これは新1年生の入学説明会の際に配付しております、新1年生にお勧めの本20冊のブックリストです。

ブックリストの作成は、図書館が担当し、社会教育課において、各学校に配付しております。

4ページ目をお開きください。

4ページ目の下段のほうには、新1年生にも保護者の方と一緒に見てもらえるように、図書館からのお知らせが平仮名で書いてあります。

資料は戻って1ページ目をお願いいたします。

続いては、地域における読書活動推進として、コミュニティセンターにおける読書環境づくりについて説明いたします。

市内にあるコミュニティセンター28館のうち、まちなかコミュニティセンターを除く27館は、10平米程度から約300平米まで、その規模は様々ですが、地域住民の身近な図書室として、地域の子供たちの読書活動支援として、また、地域の歴史や情報を収集・保管し、地域発展のための情報拠点としての役割を担う図書室があります。

そのコミュニティセンターにおいて、まず一つ目、講座等の充実として、コミュニティセンターの主催講座等を通じて、ふだん読書に興味がない人に、図書室利用を促したり、子供が読書に親しめるような機会を提供するなどによって、読書活動を推進しております。

資料は4の1ページをお開きください。写真がついていると思います。

これは江迎地区の取組紹介の資料となります。

資料の下のほうに記載しておりますとおり、江迎地区では、合併以前から図書室を「こどもとしょかん」とすることで、絵本を通して親子の触れ合いや子供たちへ愛情のこもった言葉かけや豊かな情操を育むなど、保護者へも読書活動の推進を図っております。

具体的には、上のほうの写真でございます小学校の社会科見学で、子供たちに実際読み聞かせをするなどでPRを行ったり、秋の読書週間時のイベントとして、今年初めての取組、夜の図書館ハロウィン、それから、月1回、乳幼児を持つ親子向けの読み聞かせ講座や夏休み等の長期休暇中に、小学生向けの読み聞かせ講座を開催しています。

資料は次の5ページをお願いいたします。

これは相浦地区コミュニティセンターで開催しました「クリスマス・わくわくおはなし会」です。コロナが流行する前、公民館長がサンタに扮しまして、記念撮影をするなど楽しい様子が伝わってきます。

このほか世知原地区では、小学1年生を対象とした図書室の利用の仕方や過ごし方をお伝えする教室「図書室へGO」の開催など、各地区様々な取組を行っております。

続いて、2つ目、コミュニティセンター図書室の環境整備となります。

これは、センターの複合化や長寿命化改修工事に併せた施設整備としての環境整備です。

もう一つは、レイアウトやディスプレイなどによる環境整備がございまして。

施設整備としては、ここ数年では、相浦地区コミュニティセンターや吉井地区コミュニティセンターの複合施設整備、それから宮地区の長寿命化改修工事に併せまして、図書室の整備も行っております。

木製家具や暖色系のスツール、椅子、それから視線を遮らない高さの書架配置など、明るく温かみのある図書室整備を心がけてきました。

資料の6ページをお願いいたします。

これは、長寿命化改修工事を行った宮地区コミュニティセンターの様子です。

令和3年1月の本館リニューアル後、閉鎖的で窮屈だった図書室が図書コーナーとしてロビーに設置されまして、宮地区の歴史コーナーも設置したオープンな雰囲気に変化しました。

職員によりまして、利用者が格段に増え、開放的で明るく、きれいな本が多いと、住民の皆さんからも好評をいただいているということでした。

しかしながら、なかなか施設整備は簡単にできませんので、その場合は、レイアウトやディスプレイなどで、入りやすい雰囲気をつくるようにしております。

資料7ページをお願いいたします。

これは吉井地区コミュニティセンター図書室の例です。図書室の入り口にカフェ風の案内版を置いたり、クリスマスなどの季節をテーマにした書籍や飾りつけをしたり、地域内の小学校の新聞やお便りの掲示、サークルの作品展示などにより、地域住民の皆さんが入りやすい雰囲気をつくるなど、各館工夫している状況です。

右下の写真は、ロビーからガラス越しに図書室を見た写真ですが、手前の右側が福井洞窟コーナーとして関連する書籍やパソコンも設置しております。

資料は1ページ目にお戻りください。

最後、コミュニティセンター職員研修会の部分になります。

毎年図書に関する職員研修を実施するようにしてございまして、昨年度は「公民館図書室ツアー」としまして、相浦地区と吉井地区の図書室をモデルとしまして、実際に見学をしながら、利用したくなる図書室、手に取りたくなる選書、レイアウトなどを学ぶ時間を取りました。

物の置き方一つでも、その施設の印象や雰囲気が変わること、あと人を引きつ

けるには切り口はいろいろあること。それから、こだわりは共感を得てこそこだわりになるということで、その共感の相手方は、やはり利用者であるべきだというところで、職員間での意見交換を行いながら、学びを深めました。

人と人がつながるコミュニティセンターで、本との出会いの場を広げていけるように、読書活動の推進を図っております。

社会教育課関係は以上でございます。

【朝長市長】

ありがとうございました。

それでは、次に、図書館事業と読書活動の推進についてということで、中尾館長からお願いいたします。

【中尾図書館長】

図書館事業についてご説明いたします。

資料はブルーの図書館事業説明の資料をお願いいたします。資料の1ページをご覧ください。

最初に、図書館の概要についてご説明いたします。

図書館は、市民の生涯学習の拠点施設として、社会教育の機会提供、文化水準の向上、情報提供という役割を担っており、多くの市民が訪れる場所です。

施設には、一般室、児童室、郷土資料室があり、また、移動図書館はまゆう号を運行しています。

図書や視聴覚資料の閲覧、貸出し及びリファレンスサービス業務を通じて、市民の文化交流を図っています。

図書館の利用状況ですが、昨年度は、コロナウイルス感染拡大の影響で休館を余儀なくされたり、イベント等を中止したりして、来館者は21万9,667人と、令和元年度より約40%減少しまして、外出を控えて家で過ごす時間が増えたこともあり、貸出し冊数は59万8,842冊と、令和元年度より15%の減少となりました。

次に、2ページをご覧ください。

図書館を中心としたネットワークについてです。

移動図書館は、まゆう号が市内79か所を巡回しています。

分館的機能がある4地区、早岐、相浦、世知原、宇久のコミュニティセンター図書室は、図書館システムでつながっており、所蔵している資料の貸出し、返却や、図書館で所蔵している資料の取り寄せ、返却を行っています。

さらに、大野、針尾、宮、吉井、小佐々、江迎、鹿町地区のコミュニティセンターでは、図書館が所蔵する資料を配送により貸出しや返却をすることができます。

また、利用者のパソコンやスマートフォンから、図書館のウェブサイトや電子

図書館にアクセスすることができます。

令和元年度からは、西九州させば広域都市圏事業として連携している市町と利用者カードの作成、資料の配送、研修の共同開催を行っています。

3ページをお願いいたします。

10月1日からサービスを開始しました電子図書館についてご説明いたします。

利用いただける方は、図書館の利用者カードをお持ちの方です。

インターネット接続があるところで、いつでもどこでも利用可能です。

音声読み上げや文字の拡大、背景色の変更など、一人一人のニーズに応じたサービスの提供ができます。

また、佐世保市の貴重な郷土資料や行政資料など、独自資料はログインせずに全国から閲覧できるようになっています。現在閲覧できるコンテンツは、約8,200タイトルあり、随時増やしています。

次に、4ページをお願いいたします。

図書館における読書活動の推進についてご説明いたします。

全ての子供たちが年齢に応じた本と触れ合うことによって、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、また創造力を豊かにしていきます。

図書館では、本の貸出しを基礎として、特に赤ちゃんから小・中・高校生に対する読書活動の推進に係る事業を行っています。

次に、5ページをお願いいたします。

具体的な取組・活動についてご説明いたします。

まず初めに、ブックスタートです。

絵本の読み語りを通して、親子のコミュニケーションを促進し、子育てを支援することを目的に、4か月健診会場で、絵本、バッグ、おすすめ絵本リストが入ったブックスタートパックを配布しています。

令和2年度は1,751人の赤ちゃんにお渡しできました。

次に、各種おはなし会、イベントの開催です。

本との出会い、本に親しむきっかけづくりとして、乳幼児向け「いないいないばあ」や幼児から小学生向けの「おはなしたからばこ」など、年代に応じたおはなし会を開催しています。

また、児童室では、読書や図書館に興味を持ってもらえるように、図書館祭りでは、スタンプラリー、上映会、夏休みは図書館探検ツアーや図書館を使った調べる学習講座、読書週間は謎解きイベント、クリスマスは見つけてクリスマスなど、その時々に合わせていろいろなイベントや講座を開催しています。

6ページをご覧ください。

学校支援についてです。

赤ちゃんから幼児期の子供に対しては、図書館からのアプローチを行っていましたが、図書館へ足を運ぶ機会がない、距離がある小中学生にとっては、図書館は遠い存在であり、本と触れ合う機会が少ないと思われます。

そこで、児童室司書職員が、学校の教職員はもちろんのこと、小中学校に配置されている学校担当司書やボランティアと連携し、小中学校の読書活動を推進することにより、本や図書館に触れる機会がない児童生徒に対し、読書機会の提供、読書活動の推進を図っています。

主な支援内容は、百科事典、図鑑などを活用した調べ方講座の開催、学校等へ司書を派遣、学校図書ボランティアへの指導・研修、学校司書・先生に対する選書やアドバイス、学校に対する図書館資料の団体の配送・貸出し、図書館見学対応などです。

令和2年度の学校等支援件数は647件で、学校等貸出し状況は7,240冊でした。

次に、7ページをお願いいたします。

ヤングアダルトサービス・ビブリオバトルについてです。

ヤングアダルトサービスとは、言葉のとおり、若い大人という意味で、図書館では、中学生・高校生をはじめとする10代の若者を対象としています。

図書館2階の一般室、児童室にコーナーがあり、児童室は中学生、一般室は高校生向けの資料を中心に集めています。小説やライトノベルだけでなく、職業ガイドや学校案内など、暮らしに役立つ資料を幅広く置いています。

また、ビブリオバトルを開催していて、中学生や高校生の参加もあります。

さらに、学校などでビブリオバトルを開催される際に、依頼があればサポートを行っております。

次に、8ページをお願いいたします。

最後に、今後の課題について2点挙げています。

まず1点目は、子供の読書活動の推進による情報リテラシーの形成です。

情報リテラシーとは、正しく情報を読み解くこと、正しく情報発信することです。ネット環境の普及、GIGAスクールの推進により、子供があらゆる情報にアクセスできるようになり、子供が正しい情報を読み解く力が必要となっています。情報リテラシーの基礎となる読書力、読解力を育てるために、子供の読書活動を推進していくことが重要であると考えます。

2点目の課題は、学校や地域における読書活動を支える人材の育成と確保です。

そのために、学校関係者と連携、図書ボランティアの養成・支援のため、研修会の開催及び活動に対する技術的アドバイスや情報提供に努めたいと思っております。

以上で、図書館事業についての説明を終わります。

【朝長市長】

ありがとうございました。

次に、第三次子ども読書プランについての説明ということで、読書習慣の確立、学校図書館の充実、読書に関するデータということで、高島次長お願いします。

【高島学校教育次長兼学校教育課長】

学校教育課長です。よろしくお願いします。

学校における読書活動について説明いたします。お手元の若草色の冊子、第三次佐世保市子ども読書プランをベースに説明をいたします。

まず初めに、35ページ、先ほど説明しました政策体系をご覧ください。

先ほどの説明にもありましたとおり、学校は上からの3段目横串の施策を展開しているところでございます。

一つ目の柱「子供と本をつなぐ」では、(5)学習指導要領を踏まえた読書活動、学校図書館の計画的活用、(6)の読書習慣の形成、読書の機会確保、それから二つ目の柱「環境整備」では、(3)の学校図書館の整備充実。それから青の人材育成では、学校図書館関係職員の育成研修会、学校司書の研修等に取り組んでおります。

それでは、具体的な取組、成果、課題について説明をいたします。

同じ冊子11ページにお戻りください。

3の学校における読書活動の推進、取組、成果について説明いたします。

一つ目の読書習慣の確立につきまして、①にございます学校一斉読書活動については、一日の始まりの時間帯、1校時の前の時間帯に行われる自習時間に行われることが多く、自分の好きな本を読んだり、写真にございますとおり学校司書や読書ボランティアが教室や図書室で読み語りをするなどの活動をしております。

令和元年度は98.6%の実施率でしたが、令和3年度の調査では、佐世保市小中学校とも100%の実施率となっております。

しかしながら、週当たりの実施回数は減少傾向にあり、今年度は小学校で1.26回、中学校では3.77回と減っているところでございます。

これは、朝の自習時間に計算学習など基礎学力向上の取組などを増やしている学校があることが要因として考えられます。

続きまして、中段、②の学校図書館の各センターとしての機能充実でございます。

学校図書館を本の貸し借りだけではなく、授業のための学習情報の収集活用の場所として利用することでございますが、月に4回以上授業として活用する学校も徐々に増えてきておまして、記載の小学校の数値76%は、昨年度は8

4%まで伸びております。中学校も31%と低いですが、昨年度は46%と伸びてきているところでございます。

年間の図書の貸出し冊数も増加傾向にございまして、記載では、平成25年、30年と比べましても、昨年度の調査では小学校で87冊、中学校で14冊と増えてきております。

お手元別冊資料、右肩上に、学校教育課とございます資料、縦長のA4の資料ということで、一番最後のページにグラフがございます。

貸出し冊数の推移、平成23年から昨年度の令和2年度まででございます。そこにも記載がございまして、今伸びているところでございます。これは先ほど申しました読書習慣の形成、この後申します学校司書の配置増加など、施策の効果が現れているものと考察しております。

次に、読書習慣の傾向について実績数値を基に説明いたします。

元の若草色の冊子の5ページをお開きください。

ここにあります数値は、平成25年から平成30年までの重点施策の実績数値です。近年の令和元年、2年度は、今、先ほど申しました、A4の縦長の1枚目のほうにございますのが令和の数値でございますので併せてご覧ください。

まず、5ページのほうでございますが、(2)の平日に本を全く読まない子供の割合のデータです。これは全国の小学校6年生、中学校3年生を対象に行う全国学力・学習状況調査の中の調査結果でございます。

本市の小学校6年生は、全く本を読まない子が減ってきておりましたが、最新のデータではやや増加傾向にあり、令和2年度は、読まない子が28.1%と、全国値よりも4%多い状況でございます。

中学生は、減少から横ばい傾向にありまして、昨年度の令和2年度は31%で、全国よりも6%少ない状況で、少し本を読んでいる状況でございます。

一方、(3)の表にあります学校図書の年間貸出し冊数は、先ほどのグラフで申しましたとおり、年々増加傾向にございまして、小学生で87冊、中学生14冊と伸びております。

先ほどの、本を全く読まない児童生徒が増える中、貸出冊数が増えていることから、本をよく読む子と全く読まない子の二極化が進んでいることが考えられます。今後はこの二極化への対応も必要であると考察しています。

次、お手元の先ほどの資料、A4縦長の資料をご覧ください。1枚目の裏側、◎その他のデータR3年度をご覧ください。

これは、先ほども言いました国の調査、全国学力・学習状況調査の中で、家庭内の文字環境、読書習慣に係る調査データの本市分の結果でございます。

⑥は、家に本が何冊ぐらいあるかという調査です。

具体的に数えている子、いない子も含めてでございますが、おおむね26冊か

ら100冊、200冊という家庭が一番多いようでございます。

⑦の新聞については、購読率ではございませんが、約8割がほとんど全く読まないと回答しており、新聞を読まない児童生徒が多いことが分かります。

⑧は平日に本をどれぐらい読んでいるかという具体的な時間数でございます。一番右の全く読まない数値は、一番大きい数値でございますが、一番左から3番目までの30分以上読む児童生徒を合算しますと同じく30%ほどいますので、先ほどに申しましたように、よく本を読む子と読まない子がほぼ同数値で、二極化しているということが考察されます。

これらのデータを学力テストとクロス集計したものが、このA4の紙の次の緑色の棒グラフと赤・青の折れ線グラフのクロス集計でございます。

1枚目、平日の読書量、先ほど申しましたが、小学校6年生はよく読む子と学力の相関の傾向がございます。

下段の中学生は、30分前後の生徒の学力が一番高く、読書が長いほど成績いいという相関ではございませんでした。

しかしながら、読書好きと学力の相関が次の2ページにございますが、これには一定の相関関係があり、左側のほうが大変好きな子、右側があまり好きでない子という見方でございますが、一定の相関傾向が見られ、自宅での読書傾向や読書環境が児童生徒の学力に一定の関係があり、重要であると考えております。

次に、学校図書館の整備について説明いたします。若草色の冊子、読書プランの11ページにお戻りください。一番下の段でございます。

学校図書の整備につきましては、学校司書と図書担当の教員が連携しながら、児童生徒の実情に合わせながら整備を進めております。整備に係る予算でございますが、令和2年度は決算額で4,594万円執行させていただき、全校で2万6,000冊の新規の図書を購入いたしております。

学級数に応じた図書標準冊数の割合も蔵書率は、令和2年度は小学校が92.2%、中学校99.8%となっております。ほぼ100%の蔵書率となる学校が増えるよう計画的に整備を進めてまいります。

12ページをご覧ください。

③の学校図書管理システムにつきましては、記載のとおり、平成24年度に導入し、25年度から運用しております。市立図書館と同じように、バーコードによる図書の登録、貸出し管理を行うことで、業務の効率化、事務量の軽減化を図っております。

④の学校司書の効果的配置につきましては、本市は平成17年度に3名からスタートし、子ども読書プランの中で計画的に増員配置をいただきました。令和元年には23名、拠点校方式で小中学校全校の配置が実現しております。読書推進と図書館機能の充実に大きな成果をいただいております。

下段、(3)、(4)、(5)でございますが、学校司書、図書館担当の教員、学校図書ボランティア、それから市立図書館の職員さんと連携した研修会、連絡会の実施について記載をしております。

先ほど図書館長からお話がありましたとおり、子ども読書プランの実現に向けて、職種、所属の垣根を越えた形で情報を共有し、専門性が発揮できるよう、今後も連携して、機会の提供をしていきたいと考えます。

以上で、学校教育に関わる子供の読書状況の説明を終わります。

【朝長市長】

ありがとうございました。

今それぞれ説明をいただきましたが、この説明に関する御質問等があれば、何かお願いいたします。

【全委員】

ありません。

【朝長市長】

それでは、質問がないようでございますので、これから意見交換の中で質問がございましたら、その中でお話いただいても結構じゃないかなと思っております。

それでは、意見交換、読書活動の推進についてというところに入りたいと思います。

教育委員の皆様それぞれのお立場からの思いや考えをお持ちではないかと思っておりますので、委員の皆様の御意見をお聞かせいただければと思います。

まずは、経営者による視点ということで、内海委員にお願いいたします。

【内海教育長職務代理者】

よろしくお願ひいたします。

今回のテーマを与えてもらって、資料をずっと見る中で、8年間振り返ってみると、この8年でかなり教育委員会の中で、図書に関する経費であったり、いろんな活動を積極的にされたんじゃないかなというふうに思います。数字を見ると、そういうことかというのが分かりますので、後ほどお話ししたいと思うんですけど、私はやっぱり、子供たちに、本を読む、読書をするということの魅力、すばらしさをどうやって伝えていったらいいのかということで考えてみました。

実は教育委員になって、図書とか図書館とか、自分の中ですごくアンテナがぼんと高くなりました。松任谷由実が長崎にコンサートに来たんですね。そのときのタイトルは「宇宙図書館」で、そういったテーマのコンサートがあったので、行ってきました。

何で「宇宙図書館」なんだろうという疑問があったんですけど、歌の合間で、ユーミンが「図書館に行くと、宇宙が見える」と言うんですね。宇宙が見えると

はどういうことかなど。宇宙を見る。「たくさんあるその本を読むことで、過去亡くなって会えない人と会うことができる。それから、いろんな知識を手に入れようと思ったら、本当に身近に手に入れられる。宇宙なんだよなあ、図書館は」と言うのを聞いて、ビビッと全身に電気が走ったのを記憶しています。

実はその後、大阪に司馬遼太郎館があるんですけども、ここに安藤忠雄さんが、司馬遼太郎さんの資料館をつくっているんですね。これを安藤さんがずっと書いたのを見ると、「司馬遼太郎さんのエネルギーや洞察力、頭の中の宇宙を本に囲まれた空間で伝えることができるような資料館にした」というのもあって、実際これを見てきたんですけども、まさしく宇宙でしたね。宇宙の感覚、そういうものをハード面でやっぱりもっともっと子供に提供できるんじゃないかなというのがまず一つ浮かびました。

それと、子供にぜひ伝えたいのが、読書力をつけることで、基礎学力の一番根底となる部分が自然と身についてくる。これを身につけるかつかないかというのは、実はその後の人生を大きく左右するんじゃないかなど。しかし、子供のときは分からない。私自身も分かりませんでした。今になって、もっと本を読んでおけばよかったなという反省があるんですけども。

そういうことをどういう方法で、子供たちに伝えられるかなということを考えてみたんです。

例えばここに1冊本があります。神近義邦さんが亡くなる5年前からずっと自分の生きざま、何で自分はハウステンボスをつくったのかというのを原稿にずっと書かれて、亡くなるときに遺言状の中に、自分の書いた原稿を本にしてくれということで亡くなられたんです。神近さんとはもう会えないんですよ。会えないけど、この本を読むと、神近さんと会える。例えば、そういう話を子供たちにして読んでもらう。読んでどうだったという感想のコミュニケーションをするということだけでも、身近に接してくれるんじゃないかなと思いました。

ずっと考えて、資料を見ながら、確かに目標が設定してあります。何%と積み重ねて5年後にはこういうふうに目標にする。積み重ねじゃなくて、私は考えたんです、どうしたら日本一佐世保の子供たちが本を読むまちになるんだろうか。どうしたらいいのか。

それは、まず大人が、やっぱり本を読む。学校の先生方が果たしてどれぐらいの本を読まれているか分かりませんが、学校の先生方がビブリオバトルをまずやってみる。5分間の発表です。この本のよさを発表します。それを子供たちが見てみる。子供たちがやるんじゃなくて、先生方がやったのを子供たちが見て、本の魅力というのをそういうゲーム感覚で伝えていく。そういうことに例えばクラス単位、学級単位、学校単位、それから佐世保市全体で取り組んだら面白いことが、火がつくんじゃないかなということを考えてみました。

それと、一番大事なのは本の量だと思います。総務課長にお願いして、図書の購入費用がどのくらいあるんだろうかというのを調べたんです。そうすると、結構予算がきちっとついているんです。10年前の予算、それからどンドンどンドン削られていっているんです。ですが令和2年は10年前と変わらない金額。だから、図書を購入する予算が削られるんじゃないくて、逆に、買う予算がついているというのを発見しました。市として、行政として目いっぱいやってくれているんだなということを感じたので、私は最後は、やっぱり民間の力で、何としてもこの佐世保市の子供たちに図書をたくさんプレゼントをする、そういう運動をしていきたいなど。教育委員の任期が終わるので、終わった後の自分の仕事として、各企業に利益の還元、数%でもいいです、何十万円でもいいです。自分のふるさと、自分の母校に対して寄附をする。自分の近く、私だったら早岐支所に寄附をする。

そういう運動をやっていったら、行政は行政で予算を持って、それに民間の力を足すと、日本一本を買う、人口で割ったら日本一買う佐世保になり、日本一貸出しが増え、子供たちが本当に本に身近に接することができるということを考えてみました。最後は、やっぱり民間の郷土愛というのをぜひ種をまいていければなと思っています。

数字を見ていたら、いや、行政にもっと予算つけてよと言おうと思っていたんですけど、いや、よく予算はついているな、これ以上つけるというのはちょっと言えないなというふうに思いました。

それから、学校司書の方々もここ8年振り返ると、かなりの方を雇用していただいて、活躍されているということで、佐世保市教育委員会よくやっている、それに民間の活力を入れていこうやというのを考えてみました。

ちょっと時間オーバーしました。申し訳ありません。以上です。

【朝長市長】

ありがとうございました。

それでは、萩原委員お願いします。

【萩原教育委員】

私も、今、課長さん方の説明をお聞きして、それから第三次佐世保市子ども読書プランを読ませていただいて、皆さんがありとあらゆる、子供に本を読ませようという発想で、いろんなことをされて、そしてだんだんと第一次、二次、三次とよくなってきて、佐世保市の子供たちも、小中学校に関してはあまり減ってない、読書量としては、昔に比べれば減っているでしょうけど、まあまあいいところいっていて、よくされているな、もうほかに言うことないんじゃないかなと私は感じた次第でございます。

一番いいのは、小学校に入る前、子供たちのブックスタートの取組かな、それ

は本当に素晴らしいと思います。私が子育てをしているときにはそういうことはございませんで、今のお母さん方に本当に、小さい子供に本を読んであげることが大分浸透してきて、かなり子供たちは絵本を読んでいるんじゃないかなと思って安心しています。それは、子育ての一番大切なところの肌と肌を触れ合って、お母さんと同じ時間を共有するというような子育ての一番大切なところを含んでいるので、ぜひぜひ、予算をたくさんつけて、頑張らずと続けていただきたいと思っています。

ブックの紹介というところまでは来ているんですが、あと一つ何か踏み込んで、読書の記録のようなものがそれにならないかなと思っています。紹介だけだったらさっと過ぎてしまうんですけど、こういう本を読みましたよというような、印か何かをつけるような欄があったり、白紙の欄があって、そこに「これも読みました」と書き込むようなところがあれば、今、コミュニティセンターも本がたくさんあるし、図書館でも幼稚園でもどこでもみんな連携がありますので、そこで何かしてもらって、一つの読書の手帳みたいなのができれば、それを子供が入学するようなときに、あなたが生まれたときからこんなに本を読んだのよというプレゼントとして渡してあげられれば、また、小学校に入ってから読書のきっかけというかな、そういうことになるんじゃないかなと思って、ブックスタートにはとても期待しております。

それから、小学校、中学校になっても、たくさん皆さんしてくださっているのと言うことはないんですが、やっぱり朝の一斉読書とか、時間が減っているというけど、それは減らさないで、ぜひともしていただきたいと思うし、朝の一番の集中力をつけるのにはとてもいいことですから、それしてもらいたい。

それから、自分の読んだ本の紹介というのを、学校訪問に行ったりすると、教室の後ろに時々書いてあるんですね。そんなのを読むと、とてもうれしいので、読みっ放しにせずに、自分で読んだことを少しでもまとめて人に伝える。そういう教育はずっと、そういう子供が求められているみたいなので、ぜひともしてほしい。

それから、さっき言われたビブリオバトルも図書館の協力がとてもあるみたいですから、ぜひとも読書週間とか、読書委員会とか、そういうところでいただければいいかなと思っています。

それとブックトークというんですかね、同じ本を読んで、その感想を言い合う。それは先生方が国語とか道徳の授業をやっているのと全く一緒だと思うんですよ。状況はどうなのとか、主人公はどう思っているのとか、皆さんに聞く、それと一緒にすることなので、割に取り組みやすいんじゃないかなと思います。

そういうことをしながら、何か子供に本を読むことを競わせるということも少ししていいんじゃないかと。大人がどンドンいろいろ何かしてあげるだけじ

やなく、子供自身が本を読もうというような、あの人を読んでいるけど、自分は読んでないから悔しいとか、よし頑張るやろうとか、そういうふうを感じるのは、自分が読んだ本の紹介の場があるということなので、そういうことをして、少し競わせてあげたらいいんじゃないかなと思っています。

昔よく、図書館で経験ありませんか。図書カードにちょっと気になる人の名前とかがあったら、それ読もうとか、また読まれてしまったとか、絶対今度は自分がこの人より先に読もうとか、何かそういう競う心をずっとつくってあげれば、もう少し子供たちが本の楽しさというのに触れるんじゃないかなと思っています。

本を読むことの楽しさをちょっとでも経験すれば、人生で読めない時期もありますけど、必ず人生でまた読む時期に戻ってくると思いますので、子供に楽しささえ教えていけば、どこかでまた生涯学習につながってくるような読書の仕方ができるんじゃないかなというふうに思っております。

以上でございます。

【朝長市長】

ありがとうございました。

それでは、保護者の視点による意見ということで古賀委員をお願いします。

【古賀教育委員】

やっと読み語りがこの前再開できるようになりました。私もボランティアで朝に読ませていただいて、先ほど社会教育課さんもおっしゃった学校図書ボランティアネットワークさせばにも属させていただいているんですけど、この前やっと、ちょうど1年ぶりに再開できまして、今の1年生には初めての朝の読み語りのボランティアができました。

目をきらきら輝かせて、楽しそうに聞いてくれて、私もそのたびに元気をもらっているところなんですけれども、先ほど、課題図書の話をお萩原委員もおっしゃったんですけど、図書ボランティアが、ある学校では課題図書のブックトーク、こういう本だよというお知らせをボランティアの方が夏休み前に、1時間授業をいただいて、されています。紹介するというのは、興味を持ってもらって、読書につながるの、ボランティアさんの力もたくさん、学校の先生も借りていただいて、たくさん子供たちに本が紹介できたらいいかなと思っています。

その中で、朝読むと、「その本は学校で借りれますか」という質問する子供たちもいます。市立図書館で借りたり、個人の持ち物だったりする本があるんですけど、「ごめんね、これ学校にないのよね」というのが時々。ごめん、申し訳ないなと思うときがあるんです。

やっぱり学校に置いてあるのは、授業だったり夏休み前に借りたりして、結構読んでいる子も多いので、読んだことのない本を持ってあげようかなあと

いう気持ちでそうすると、学校では読めないということになってしまうので、そういうのも司書の先生と相談しながら、選書されている学校もあるので、何か本当に、ボランティアさんと、学校図書司書さんとそういう連携がとれれば、もっともっと図書室が充実するんじゃないかなと思っています。

それで、今不登校が増えているという実態もあるんですけど、保健室と同じように、図書室にいると心が落ち着くとか、ここだと自分のやりたい学べるものがそこできるという空間とか、環境にも図書室が今なっているので、ぜひ。

先ほど司書の先生の配置が貸出し数に好影響を与えているとおっしゃっていたんですけど、ちょっと調べたんですが、長崎市では、小学校が68校、中学校が37校のうち司書の先生は43名いらっしゃって、37校の中学校を拠点として、司書の先生が配置されて、ほかの小学校にも行かれているということで、私たち佐世保市と同じような体系を取られているのかなと思いました。

隣の佐賀県佐賀市に聞いたら、小学校35校、中学校が18校、司書の先生は51名、プラスパートの先生も43名いらっしゃるということで、何かすごく数が、司書の先生がたくさんいらっしゃるなという影響を受けました。

貸出し数にとっても影響があるということなので、ぜひぜひたくさん、23名も今いらっしゃるんですけども、もっともっと、予算の都合もあられるとは思いますが、司書の先生を各1校1名ぐらいに配置していただいて、やっぱり図書室が真っ暗だったり、鍵がかかっていたりするとその時間は本が借りれないとか入れないということもありますので、不登校とか教室には入れないんだけど、図書室には入れるという子のためにだけではないんですが、やっぱり誰もいない空間では駄目なので、そこに司書の先生がいて、会話をするわけでもないんだけど、その子は落ち着く空間で、いられる場所だという、何かそういう場所にこれから図書室もなっていってもいいのかなと思いました。

そういうのに司書の先生ももう少し配置していただいて、いつ行っても司書の先生が図書室にいるというスタイルがとれたらとってもいいかなと思いました。

それと、先ほど言われたブックスタートは私もとてもよくて、私もいまだに持っていますし、バッグも利用させてもらっているんですけど、片や、さっき、読む人と読まない人の二極化と言われたんですけど、今度は過剰教育がなされることもちょっと心配です。

この前も、生後7か月の赤ちゃんに、フラッシュ勉強と言って、それこそ画面を見せて、何かこうお勉強させているという保護者の方もいらして、ちょっと勘違いしているんじゃないかなと思うところもあって、そういうのも含めて、ブックスタートというのも、先ほど萩原委員も言われましたけど、少しずつ、家庭教育じゃないですけど、そういうものに位置づけがなってきたらいいかなと思います。

ました。

それと一つ質問なんですけれども、学校の図書室に本をたくさん増やしてくださるのはもちろんとてもうれしいんですけど、結構古い本もたくさんあって、それを処分するタイミングは決まっているのかなと。中には、物すごく古い情報があって、もちろんちょっと奥の下のほうにあると、子供たちは手には取らないんですけど、そのままあって、図書室もやっぱりキャパが決まっているので、だんだん行き場所がなくなって、でも処分できないしという本がたくさんあるんじゃないかなとちょっと思いましたので、そこが気になりました。

以上です。

【朝長市長】

ありがとうございました。

今、質問ということなので、これは先に事務局から古い図書の処分の仕方、そういうことをされているのかについて回答をお願いします。

どうぞ。

【高島学校教育次長兼学校教育課長】

ご質問ありがとうございます。

まず、廃棄図書のまず冊数からご報告いたします。

年間、令和2年度でいきますと、年間全て70校で1万2,000冊の廃棄がなされております。

廃棄の基準というものは特にないというふうに考えています。

児童書の場合には、特に破損のスピードが速いと。つばとか汗とかそういったものが付着しやすく、カビが生えたり、それから、破損、破れとかいうのがございまして、そういったものから順にまず入替えをしているところでございます。

先ほど言いましたように購入は2万7,000冊で、廃棄が1万2,000冊という形で、順次入替えしているところでございますが、今の廃棄基準としといたしましては、そういったものを。あとは登録年度が昭和だったり平成の初めであったりというものを廃棄の一定の基準の中でやっているところもございます。

以上です。

【朝長市長】

質問に対する答え、いいですか。

【古賀教育委員】

ありがとうございます。

【朝長市長】

ありがとうございました。

それでは、次に、学校現場の視点による意見ということで、松野先生、よろしくをお願いします。

【松野教育委員】

まず、私が学校現場を知っているということになりますけども、特に「読書大好き佐世保っ子プラン21」が始まる前の平成20年ですかね、それと令和元年を比べますと、各学校の図書館での貸出し冊数は2倍ぐらいは伸びている状況にありまして、こういったことにつきましては、これまで一次、二次という形で、読書プランを続けてこられた一つの成果としっかり捉えていいんじゃないかなと思っております。

全校一斉の読書活動とか、あるいは先ほど説明がありました学校図書館管理システムの効果的な利用とか、学校司書の計画的な配置、あるいは先ほどありました図書ボランティアのご協力によって、児童生徒の読書環境は着実に整備されておりました、これから第三次プランということに関しても、非常に期待が持てるどころかなと思ってるところです。

ただ、学校現場はかなりいろんなことをやらなくてはいけないところがありまして、先ほど萩原委員さんのほうからも、朝読書については残してほしいということがあられますけども、もともと朝自習だったものを全部朝読書に切り替えることでやってたんですけど、また、いろんな面で、逆に学力充実などで朝読書の取組というのがやっぱり回数が減ってきたというのは、なかなか実態としても難しいところにあるんじゃないかなと思っております。

また今度は、調べ学習などについて、学校図書館を利用するというのもやっていたんですけども、今回、スマートスクールSASEBO構想によって、児童生徒一人一人にパソコンが1台配られたということで、逆に言うと、普通教室でも調べ学習ができるようになった環境が出来上がったということになります。当然、学力向上の取組につきましては、教育施策の一丁目一番地でありますし、スマートスクールSASEBO構想につきましても、子供たちがこれから新しい時代を生き抜くために必要な創造性とか社会性を培うために必要なことですので、これもしっかりやっていかなくてはいけないということで、やっぱり時間をいかに有効に使うかということになりますけども、なかなか学校の現場のほうでは、要するに全校一斉というのはなかなか難しい状況が出てきたなというのが実感としてあります。

では、一斉読書ではなくて、じゃあどうすればよくなるのか。個々の子供たちを引き込むやり方を見つけないといけないかなと思われまして、やっぱりこれまでしっかり長く学校図書館が培ってきた読書センターとしての機能をより活性化するというのが一つの方法かなと思っております。

それから、これまで教育研究会の図書館部会などで取り組んでいた「学校図書館改造ビフォーアフター」、こういったことで、司書教諭の先生とか、学校司書の先生方が共同して、図書室の環境整備を継続してこられたということで、これ

につきましては、以前とは比べられないような、非常に落ち着いて読書ができる雰囲気、あるいは安らぎのある環境というのがつくられてきたというのが、今あるところでもあります。

ということで、そこにどう引き込むかということになってくるわけなんですけども、なかなか難しいところがありますけども、一つは国語科という教科のほうで、やっぱり読書には非常に関連づけられた教科でありまして、国語科のほうにつきましては、各学年の目標については、小学校1、2年生から中学校3年生までしっかりと発達段階に応じた読書への取組ということが明記されておりますので、それに従った学習をしっかりとこれから進める。

そしてまた、今年から佐世保に採用された中学校の教科書につきましては、ブッククラブとかビブリオバトルとかブックトーク、そういったものを授業の中でしっかりと落とし込んでいこうというような教育課程を組んでいるものになっております。

そういった点で、そういったものを利用しながら、それを起点として、それを学校全体のほうに広げていくというような方策があるんじゃないかなと考えております。

もう1点は、やはり児童生徒の自主活動、あるいは委員会活動、これが有効なんじゃないかなと。先日学校のほうで、昼休みの時間に、図書委員会が中心となって、今さっき出ましたビブリオバトルをやっているのを映像で私も見せてもらいましたが、やっぱり子供たちが生き生きと、自分の意見をはっきり言うし、そしてまた、改めてそれをしっかり聞いて、最後に「一番読みたくなった本はどれですか」と。「これ」とさっと指して聞きよるわけなんですけど、やはりああいったものを見ておりますと、実際ふだんは読書にあまり興味のないような子供たちでも、いわゆる友達、クラスの子供たちが薦める本であれば、ずっと入り込むというようなことがあるんじゃないかと思っておりますので、こういった委員会などを通じて取組も深めていくことになっていいのかなと。

こういった点で、いろんな仕掛けを継続していくことで、子供たちの読書に対する意欲が高まってくるんじゃないかなと思っております。

もう1点ですけれども、第三次のプランで、学習センターとしての図書館の機能充実が挙げられておりますけれども、なかなか現時点では、中学校なんかを見ても、学習に活用できる図書資料というのは乏しいかなというのがありますので、それも含めて、雑誌とか新聞とか視聴覚資料、そして、電子資料も含めた図書館資料をぜひ充実していただければと思っております。

もう一つ、地区コミュニティセンターの読書活動推進につきましては、次回、2回目でちょっと話させてもらえればと思います。よろしく申し上げます。

以上です。

【朝長市長】

ありがとうございました。

一通り終わりました。あと教育長、少しお話しいただけますか。

【西本教育長】

私からちょっと皆さんに、あまり楽しい話じゃない話をさせていただきたいと思うんですけど。お手元に、右肩に2021/12/17、令和3年度第2回総合教育会議資料というものがあるかと思います。

まず、1ページ下のほうに、経済協力開発機構、OECDが、学習到達度調査というものをやっておりましたと言いましたけれども、読解力の危機ということで今言われているのが、ここに書いてあります。

いわゆる日本の子供たちですが、これは15歳の高校1年生を対象にしたもので、数学とか科学についてはトップクラスに入っています。ところが、読解力が順位を落としたというふうに言われています。8位から15位に落ちたという衝撃が、まずあります。

ここで、次の2ページに、皆さんをお試しするわけではございませんが、どういった問題があるのかということで、問題をちょっと書いてみました。これはある本からの抜粋です。

まず、1番目に本に対する表があって、その問題文の中から「以下の文章の中で、事実か意見かというものはどれですか」という質問が出ていました。

例えば、①は、本書には、自らの選択とそれから環境に与えた影響によって崩壊した幾つかの文明について書かれている。これが事実か意見かと。

例えば、その②は、中でも最も気がかりな例がパラヌイ族であるという、これが、事実か、感想、意見かというものを下のほうに回答が書いてございまして、事実と言われるのは①、③、④であって、②とか⑤は意見、その人の感想だという答えです。

次の3ページを見ていただきますと、問題があって、これにはパーセントが出てきております。

仏教は東南アジア、東アジアに、キリスト教はヨーロッパ、南北アメリカ、オセアニアに、イスラム教は北アフリカ、西アジア、東南アジアに主に広がっている。この文脈において、下の文中の空欄で当てはまるものは何かということです。

オセアニアに広がっているのは〇〇であると。これに答えることができた中学中では62%、高校生で72%。ほぼ、中学生で4割、高校生で3割が間違っているという結果になっています。

下のほうにもう一つ問題があります。

幕府が1639年ポルトガル人を追放し、大名には沿岸の警備を命じた。この文章と以下の文書は同じかどうか。以下の文章とは、1639年ポルトガル人が

追放され、幕府は大名から沿岸の警備を命じられた。

これに答えることができた中学生は57%、高校生で71%。実に中学生の4割が間違っている。

これは、歴史を知らなくても、文脈から読めば、当然、歴史を知っている人であれば、読まなくても分かるはずなんです。知らなくても、幕府は命じられたのかというのは、上のほうで読めば分かる問題だと思うんですよ。これが分からないのが中学生の実に半数近くいるということです。

今の中学生の2割というのは、次の4ページですが、文章の主語と目的語が何かという基礎的な読解ができず、約5割は教科書の内容を読み取れていないというのが、朝日新聞の2016年度11月9日の記事に出ております。

こういうことを受けて、文科省の動きは、2022年度から、高校生の国語の教科書が変わっていきます。読むから話す・書くへと学習の内容を移行し、情報の収集力、処理力、表現力を強化していくということになります。

今まで国語は4単位ですが1つだったものが、現代の国語ということで実用的な文書、いわゆる契約の文章とか実務的な文章を読み解く力がまず一つです。これが2単位です。言語文化というのが今までやっている古典を読んだり、文学作品に触れたりというのが2単位。これを二つに分けて、しっかりと基礎力をつけようというふうに変ってきております。

先般、新聞に載っておりましたけども、ある教科書会社が、この現代国語、実務的なものには小説は載せたら駄目だよというふうに文科省が言っていたのに、その教科書会社が小説を載せておまして、ところが現場の先生はその教科書を取った方が十何%と結構いたので、ほかの教科書会社が、これは何だ、けしからんというふうな話になったようです。

我々が知っている言語国語はこの言語文化ということで入ってきて、現代の国語では、実務的、実用的な文書を読ませるというふうに変ってきているということが言われています。これはやっぱり、読解力の力がなくなってきているということの裏返しかなというふうに思っております。

ちょっと愚痴をこぼしました。

先ほど学校教育課からありましたけれども、読書時間の調査があつたと思いますが、全国の比較を見ておりました。確かに伸びてきてはいるんですけども、まだまだですね。全国が赤で、佐世保市が青です。それで2時間以上読むというのであれば、若干まだ全国に追いついていないかなという結果が出てきております。

令和3年度の全国学力・学習調査の結果です。

中学校を見ても逆なんです。中学校は、長く読む時間を取っている中学生が多いんです。先ほどちょっとありましたよね。これ正答率とは関係がな

いと、中学生は相関関係にない。たくさん読むから成績がいいかというところでもない。考えてみましても、既に、小学校の段階で読解力がついてないと、追いつけていけないということの結果かなと思います。

正答率が高い小中学生の学習習慣というのは、この全国学力・学習状況調査の中からいくと、まず小学生の場合は、ふだんから30分以上は本を読むということがまず言える。それから、学校が休みのときに本を借りたり、図書館に行ったりすることが大事だということも言われています。

二極化という話も出ました。やっぱりたくさん読む子と、読まない子の違いがあります。小さい子供さんを図書館に連れてくるとか読み聞かせをするというのは本当に熱心な保護者です。そういう方は以前に比べるとたくさん増えてきているんですが、そうでない家庭も物すごく増えてきているんじゃないかと。それが二極化になってきていると思っています。

2017年度は、保護者に対する調査をしたときに、知的な刺激を持っている場所、そういったところへ出かける親の行動が子供の学力に影響している、関係していると。美術館とか博物館、図書館とかに連れて行く親御さんの子供については、学力が高い傾向にあるんじゃないかということです。

最終的に、次の7ページになりますけども、やはりたくさん本を読んだ子は、内海委員さんが言われましたけども、下の矢印の下にありますけど、社会性が高く、意欲、関心が高い、そして論理的思考能力が高いという傾向で、面白いのは、けんかした子供たちの仲直りさせる力がある、友達に相談されることがよくあるという傾向があると言われています。

佐世保市における読書活動の課題ということになるかと思いますが、おっしゃっていただいたように、だんだん貸出し冊数も伸びてきておりますし、学校司書さんの数も増やしていただいて、学校訪問に行くとか分かるように、図書館で非常に楽しい雰囲気に満ちてきています。そういう意味では、環境としては整ってきているのかなという感じがいたしております。あともう一つ、何か頑張ろうということを思っています。

松野委員がおっしゃったように、今、全校一斉読書活動やっていますが、学校が本当に忙しくなっているから、限られた時間の中で学力向上のための取組もしないといけない、その一方で、やっぱり図書活動もしなきゃいけないということになってきますので、うまくいっている学校があると思うんですね。やっぱり量じゃなくて質かもしれない。そういうところを全部見習って、全校一斉ですけど、うまくいっている学校のやり方を取り入れてみたらどうかと。個性とか何とかというより、そういう話ではなく、いいところは全部取り入れて、やってみるということ、模範になる学校を、やっぱり全校一斉にやってみたいというふうな私は考えを持っています。

それから学校司書の処遇の問題もありますし、支援もやっぱりやっていかないといけないということと、こういう厳しい状況というのを保護者の方にも知っていただく。「よろしいですか、社会に出ていったときに、書いてあることは読めるんだけど、何が書いてあるのか分からないということでもいいですか」ということだと思っんです。

あと幼稚園、保育園に対する支援です。ある話では、小学校1年生についている力は、中学校になって取り戻そうと思っても取り返すことが難しいと。やっぱり一番最初の、三つ子の魂と言いますから、そこで、幼稚園、保育園に何ができるのかということちょっと考えてみたいなど。ここでやっぱりしっかりと読みたいと思う本を探して出してあげるとか、興味を持たせるというのが大事になってくるんじゃないかなと思います。

少し長くなりましたけど、先ほど聞いておりました、そういうふうな感想を持って、自分なりに一応まとめて言ったつもりです。

以上です。

【朝長市長】

ありがとうございました。

それぞれの意見、あるいはお考え等いただきまして、ありがとうございました。大変参考になるというか、皆さん方それぞれの立場から、よく考察されているなというようなことを感じさせていただきました。

その中で、学校にしる公民館にしる、いろいろ設備的には少しずつ充実してきているということ、これはご評価をいただいていると思いますし、司書さんの活動につきましても、佐賀市などはどんどん、実施予算等あるいはプラスアルファというようなところもあるということですが、昔の佐世保市と比べますと、非常にいい状況になってきているとは思っております。

ただ、まだまだということだと思っしますので、司書さんがいらっしやるのといらっしやらないというのは随分違うというのはそれも感じております。

特に古賀先生がおっしゃったように、子供の行き場というところで、不登校の子供たちに保健室だけで対応できるかとなると、そうでもないということもあろうと思います。学校、教室の中でどうしても、勉強できない、教室ではどうしても居づらいという子供たちにとっては、やはり、どっかに居場所が必要じゃないかなと思います。保健室がそういう場なのかと感じますので、図書室をそういうような形に利用していくということは、すごくいいことじゃないかなと思います。しかし、そこにどなたかがいらっしやらないといけないなということもあろうかと思っしますので、いいご提案をいただいたんじゃないかなと思っております。

それから、内海委員がおっしゃいましたように、いろんなものがそろっている

よということなのですが、あとはどうすればいいのかということなんですね。どうして、子供たちに読ませるかということ。それはそれぞれの先生方も全く同じことだと思いますが、そこが一番の課題じゃないかなと思っております。

特に家庭において、保護者の皆さんたちが、非常に熱心に本を子供たちに勧めるご家庭と、全くそうじゃないご家庭というようなことであろうかと思うんです。学校では、一定朝の読書をしたり、いろんなことで指導するわけですが、やはり家庭に帰ったときに、ほとんど家庭で、保護者の人たちが、まずは、親御さんたちが全く本を読まないということになってくると恐らく子供さんも読まないだろうなというような感じがしますし、そういう習慣づけということができなければ、恐らく読まないままですっと続いていくということになって、さらに二極化、あるいはその二極化がどんどん広がっていくというような状況になるのかなという感じを持ちました。

今、教育長が最後におっしゃったように、家庭での取組の啓発、これをどうするかということところが、非常に大きな課題かなという感じがするんですよ。学校では一定やっている、そしてまた、松野委員がおっしゃったように、学校もとにかく忙しいんだよと、やることいっぱいあるんだよということなんですね。学校でこれ以上に、「またこれもやれ、これもやれ」と言うのはなかなか難しいところもあろうかと思しますので、家庭での啓発という、家庭での取組ということはどういうふうな形でやっていくか。家庭で習慣づけられるということはどういうような形ですかということですよ。

初めに、杉本課長のほうから、1年に1回何か研修会みたいなことをやっているということがありましたよね。出席者が50名とか100名とかというような感じで、出席する人というのは、すごくやっぱり熱意がある人、あるいはそういう見識のある人だというような感じがするんですけどね。何事もそうなんですけど、出席をされない方たち、そういう方たちにどういう形で進めていくのかということなんですけど、これが非常に難しいなということだと思いますよね。それが分かればいろんなものが解けていくんだなという感じがするんですけど。

親御さんたち、保護者の人たちにどういう形で進めるかということ。これについて何か名案があらわれるかどうか、それを含めて、2回目のそれぞれの視点からのお話もしていただければいいんじゃないかなと思いますので、内海委員からまたお願いいたします。

【内海教育長職務代理者】

親としては子供の成績がやっぱり一番関心があられるのかなと。じゃあ、その成績を上げるために、目の前の点数というよりも、自分の子供はやっぱり高校、社会人になったときのために何が必要かということを繰り返し繰り返し、あらゆる方法で、やっぱりアプローチしていく。

それは、実は本を読むことなんです。本を読んで、私もこう考えたんですよ。じゃあ自宅に本がどのくらいあるかと。それは、物すごい差があると思うんです。新聞も読まなくなつて、本も読まない。それを親に読みなさいというのは、まず無理な話で、ただ、自分の子供は、30年、50年、60年後にどうあつてほしいかという、そのための基礎がこうですよ、本を読むことなんですよと。

もう一つは、学校の図書館の時間というのは、民間的に言うと営業時間、学校が開いているとき、しかし、図書館のあの空間を、先ほど古賀委員もおっしゃいましたけど、もっともっと開放していいんじゃないかなと。学校司書の勤務時間もあるんでしょうけど、それを若干スライドさせて、放課後に開放するとかという方法もあるんじゃないかなと。

とにかく環境を与えて、あとは、ネットにつながりましたので、学校と子供がつながっているということは、子供の後ろには親御さんがいらっしゃるの、そのネットを通してのそういうアプローチのやり方。今、子供さんが学校でこういう本を読まれていますよと、感想文がこんなんが書かれて、すごくいい感性持っておられますよ。そういうのをまたフィードバックしてあげるとか。ああそうか、本を読むためにどうしたらいいかといったら、休みの日に親御さんと一緒に図書館に行くとか、先ほど美術館に行くとかという話がありましたけども、それを一緒にやりましょうよという、何か運動ができればなと思うんですけど。

私自身も親から本を読めと言って、それを拒否して、漫画本ばかり読んで、結果、大学受験のときにすごく苦労して、そこから私は本を読み始めました。すごく時間がかかるんですね。遅いんですね。やっぱりもっと小さいときに親の言うとおりにやるとけばよかったなと反省があるので、あまり私も言えないんですけど、とにかくアプローチを続けていく、継続性かなと思いました。

以上です。

【朝長市長】

ありがとうございます。

萩原委員お願いします。

【萩原教育委員】

家庭での取組というのは、何につけても家庭での教育というのがもう一番、みんなばらばらですから、本当に難しいなと思っています。

私もやっぱり、本を読むことがこんなにいいことです、成績がちょっと上がりますよとか、ここができないからこうしましょうというようなお知らせとかを学校通信、学級通信、何かそういうので、どんどん繰り返していくとか、参観日のときに、こんな本も読んでいますというようなさっき言った本の紹介とか、そういうことをずらっと並べて、うちの子は載ってないとか、そういう危機感を持たせるとか、何かそういう、何回も何回もやっぱり発信するしかないんじゃない

かなというような気がいたしております。

受け取るほうはもう全然違いますので、本当に一番難しいのが家庭教育だろうなと思っています。

この前、税の作文というので何か賞をもらっていた人が、ブックスタートと図書館のことに触れていたと思いますが、図書館というのは、一番、赤ちゃんから老人、誰にでも平等に開放された場所だから、みんなに平等の税を使う建物というのは、こんなにすばらしいところがあるんだというようなことを中学生にして気づいていました。そういえば、そういうところから言えるんだな、図書館がいいなというふうに言えるんだな、そういう見方もあるんだなということをちょっと私も学んだんですけど。こういう子は本もよく読むんだらうなと。この前下村脩の発表会もありましたけど、あのときも、これは本を読まない、調べが進まない、この子たちは本を読むんだと非常に感心したんですが、何かそういう私の経験みたいな、そういうのをどなたかに伝えていくというか、学校で発表の場があるというような、できる方の、たくさん本を読む子の経験みたいなのも、クラスとか学校で少しずつ発信していくことも必要かなというふうに思っています。

私は、孫がいるんですが、ブックリストと言って、落合恵子さんがしている本屋さんがあって、そこから毎月、ママの名前で本が届くという制度があるんですけど、それで、今、幼い頃から本に親しませようと思ひまして、実行しております。孫たちに毎月本を送っております。自分の名前で来るもので、毎月とても楽しみにしてくれて、お母さんに読んでもらいなさいよと言って読ませています。

そういう何か、いろんな情報の発信ということで、私たちも、小さい子供にしてあげること、できることがあるというようなことを繰り返し繰り返し、皆さんが何かいろんなことで、学級通信を通じて、学校通信を通じて、いろんな刷り物を通じて皆さんに配ってあげる、それを読まない人もいますので、学校に来てもらって、お母さんたちにお知らせするとか、何かそういうことをするしか、もう努力しかないのかなというような気がとてもしています。

以上です。

【朝長市長】

ありがとうございました。

古賀さんお願いします。

【古賀教育委員】

この前、世知原中学校に訪問させていただいたときに、図書室に入ったら、一番目につく新刊コーナーに、今人気の漫画のノベライズ本がずらっと並んでたんですね。司書の先生に聞いたら「とても人気があるんですよ」とおっしゃって、読まないよりは読んだほうがいいので、人気のあるノベライズ本は本当にたく

さんそろえていただいていたいいんじゃないかなと。貸出して、次借りるまでに待っていたりとかするぐらいの本もあるみたいなので、それは小学校も一緒です。

中身はしっかり司書の先生が考えて、選書して入れていらっしゃると思うので、人気のある本をノベライズ本でもいいのでたくさん入れていただいたらなと思いました。

それと、学校からの宿題として、音読をきなさいというのが、多分4年生ぐらいまであると思うんですけど、これは読書嫌いになってないかなとちょっと思うことがあって。なぜかというと、うちの子も、もう終わったんですけど、「ごんぎつね」という感動する物語が教科書に載ってまして、それを音読してきなさいねというのを2か月しているんです。

「ごんぎつね」だけで音読を2か月、幾つかに分かれてはいるんですけど、それを2か月も音読して、これはどうなんだろうとちょっと思うことがあって。ほかの課題は大体2週間とか、早いので1週間ぐらいで音読は終わるんですけど、もしかしたらこれが、読書はつまらないなというのにつながっていたら残念だなと思って。音読って何だかなと、ちょっと思うところがあったので、その辺を、子供によっては同じものを何回も読みたくないという子も中にはいて。中には学習障害の子もいます。初めて読むのは、何冊でも読みたいんだけど、同じものを読みたくないという子も中にはいるみたいです。それも聞いたりしたので、音読というのも、何かもう一度、考えてもらえたらどうかなとちょっと思いました。

3年生の子で1週間で6冊読んできなさい、感想書いてきなさいという宿題も出たりとかもあったみたいなので、何かその辺も、宿題とするとそうになってしまうので、何かその辺をもうちょっと、楽しく取り組めるような何か方法がないかなとちょっと思いました。全部学校の先生に丸投げみたいになってしまうんですけど、そういうのを見直すと、本に興味を持ってくれるかなと思いました。

以上です。

【朝長市長】

ありがとうございました。

松野先生。

【松野教育委員】

地区コミュニティセンターの読書活動の推進ということで、今年の4月から公民館がコミュニティセンターに変わったわけなんですけども、その中には地区自治協議会の事務局も入っております、地区コミュニティセンターが現在の地区における生涯学習の拠点となっているということ。

また、併せまして、コミュニティセンターの図書室は、先ほどもご説明ありましたが、地区の皆さんのための図書室として、郷土史関連の資料も含めて、地域の読書文化を支える拠点になるという形になっております。

そこで、読書活動を推進するためにはということ、まず自治協議会のほうには、地区の地域の子供たちの見守りや健全育成に携わっている方々が多数おられますので、そういった皆さんに、読書の重要性とか、今回は子ども読書プランの内容、こういったものを十分にご理解いただいた上で、地域の中で、例えば、読書に関するセンター主催の講座とか、あるいはセンターだよりなんかを用いて、地域へ広報を続けたりする中で、読書の推進も含めた文化教養の向上に地域全体で取組む体制というのを構築できるんじゃないかなというところがあります。

そういった中で、実際に地域の方々の力をいろんな形で利用する、活用する。お父さん、お母さんが難しければ、おじいちゃん、おばあちゃん。おじいちゃん、おばあちゃんが難しければ、地域のおじさん、おばさん。そういったことにいろんな方々が一体となって、地域の中で読書活動を育んでいくというシステムができ上がらないかなということを考えております。

また、地区のコミュニティセンターの環境整備に関しましては、先ほどもご説明ありましたけれども、市立図書館とのネットワークをさらに構築して、確立するとともに、やっぱり地区のコミュニティセンターの図書館だけではなく、小中学校の学校図書館と連携をすることによって、例えば新書の購入の際にもいろんな情報交換とか、調整などをすることによって、子供により多くの図書に触れさせる機会ができるんじゃないかなというところを考えられますので、そういう点を進めていければなと思っております。

いずれにしても、図書購入の予算は非常に乏しいものですから、さらなる増額が望まれますけども、先ほど内海委員さんも言われましたが、民間の要するに地域における地区内の各団体とか各企業の皆さんからの援助を期待したいところだなと思っているところです。

以上です。

【朝長市長】

ありがとうございました。

教育長。

【西本教育長】

読めと言われると余計読まないというような。音読もそうなんですけど、宿題化すると非常に厳しいかなという気がします。

聞いていて面白かったのは、子供の成長を願わない親はいないわけで、本を読むことが大切であるということは、頭ではどんな親御さんもお分かりになっているんだろうと思うんですが、忙しくて、音読するためには親御さんも拘束しなくてはいけないので、今、共働きの家庭があって、お疲れになって帰ってきているときに、「ねえ、ねえ、読むから聞いてて」と30分も読まれると、聞いてい

たら寝てしまう、テレビも見られないということになるのかなと思います。やっぱり課題として、宿題とすると非常に厳しいのがある。

やっぱり子供がこれだけ読んだというのをうれしがる親のほうが多いと思うので、何か萩原委員がおっしゃったこの手帳とか、通帳とか、子供がこれだけ読んだというのを書き込んで、見せて、親御さんにサインをもらってくるだけでもいいよというふうにすると、「こんなに読んだの、あれも読んだの」というようになるのかなという気がして、そういうすぐ入っていけるような取組がいいのかなと私思いました。

それから、生涯学習の件で、実はあした南地区で、ぶらっ—とカフェというのが5時から7時まで2時間あるんですよ。そこに私は呼ばれていますので、行って今日の話とか、地域の皆さんに、実はこういう悩みがあるんですよという話をしようかと思っています。学校でやるというのも限界があります。家庭でどうやったら本を読むようになりますかねという話をしてみようかなと思っていました。そうすると、本が足りないから、予算をつけなさいという話にはなるかもしれませんが、一石を投じて、地域の方々と一緒に考えてもらって、地域の方々の力を借りて、何かできることがないのか。やっぱり市民総ぐるみで知恵を出し合うというのが必要かなと思っていますので、いい機会ですから、ちょっと行ってきて、話をしてみたいなと思っています。

本当に、家庭というのは非常に大事かなと思っています。なかなか答えが出ないんだろうと思いますし、やっぱりこういう「もの」というか、実際に見えるもので何とかカバーをしていきながら、意欲をかき立ててあげないといけないのかなという気がしています。

私は以上です。

【朝長市長】

ありがとうございました。

それぞれご意見いただきました。ありがとうございました。

非常にこれはいいねと思うような、そういうご示唆をいただきまして、ありがとうございました。

特に私が感じたことの中で、内海委員のおっしゃった、今の保護者の皆さんたちが、あまり学校図書館の在り方というものを知らっしやらないんじゃないかなと思うんですよ。私たちというか、親御さんたちの世代は「図書館って、そんなに行きたいような場所じゃなかったよね」とか、あるいは「蔵書も少なかったよね」とか「汚い本しかなかったよね」とか、そういう意識が非常に強いんで、今の学校図書室の在りよう、あるいは司書さんの取組方というのを見てもらうというか、学校参観等に、全校でやるわけにもいかないでしょうから、年に何回か参観日やるわけでしょうから、少しずつ、一クラス、二クラスずつ司書

の先生方と、こういうやり方しているんですよとか、こういう取組しているんですよとか、今あったような学力との相関関係とかも含めていろいろ少しお教えをすとか、子供たちにこういう本を薦めるんですよとかね、そういうようなことも含めて、機会をつくっていくといいのかなという感じを持ちましたね。

ですから、参観日か何かそういう機会があるときに、保護者の皆さんたちに、読書の重要性、必要性というものをお教えするいい機会じゃないかなと思いますので、そういうことも取り組まれたらいいのかなというような感じを持ちました。

それから、萩原委員がおっしゃった本のプレゼント。これは、おじいちゃん、おばあちゃんたち喜んでやるかなという感じがしますので、そういう定期的に、1か月に1回とか何か月に1回か、定期的に本を送り続けるということは、一つのきっかけになるのかなという感じがしますよね。やっぱりおじいちゃん、おばあちゃんから来た、あるいはおじさん、おばさんとか、お兄さん、お姉さん、そういう方たちから本が送ってきたということになると、やっぱり大切にすし、読んでみようという気になると思うしね。それが、子供たちに本を読むきっかけづくりにつながっていくのかなという感じもします。いいモデルになるのかなと思いますので、そういうこともありますよというようなことを伝えることもいいのかなと。そうするとヒントにされて自分も始めようというそういう方もいらっしゃるかもしれませんよね。そういういろんなやり方をお教えをしていくということがいいことかなと思いますので、素晴らしいご提案じゃなかったかなあと思っています。

それから、古賀委員の話の中でございましたが、いろんな本を、漫画から入るとかというようなこと、これもやっぱり重要だと思うんですよね。いや、自分は漫画で成長したという人いらっしゃる。漫画で成長したということで総理大臣になった人もいらっしゃるし、いろんなその人の考え方、あるいはそのいろいろ知識の吸収の仕方というのがあるし、そこを窓口にして興味を持っていくという人もおられるでしょうし、やはり少しバラエティにとんだものを置いておくということも必要なのかなというふうな感じはいたしますね。

やはり読書を嫌いにならないようにするというのも非常に大事なことだと思いますよね。やはり入り口から嫌になってしまうと、後は続かなくなっちゃうので。やはり、入りやすい、嫌にならないような形をしていくということが大事じゃないかなという感じがいたしました。

それから、松野委員が、ご自身もご経験があられて、地区自治協とあるいは地区コミセンとの関係の中で、地域の皆さん方にもそういう取組を進めていくということ、これは非常にいいことではないかなと思いますよね。

ぜひ、こういう事例もあるよというようなことを知っていただくお知らせを

するような、そういう場にもなるんじゃないかなと思いますよね。

今、萩原委員のご提案になったようなことも、こういうことをやっていらっしゃる方もいらっしゃいますよという、自分の孫にそうやってみようかなとかそんなことも出てくるかもしれないし、いろんな読書に関する提案をしていく、そういう一つの機関ということで、こういうことをやっていますよというようなことを教えていくようなことにつながってくるかなという感じがいたします。

それからあと、教育長からもございましたけど、いろんな会話のときに、やはり、そういう事例をお教えしていくということで、その地域において、あるいは家庭においてのやはり読書の大切さということを啓発していくことが大事かなと思います。これも、王道はなさそうな感じがしますので、いろんなことを組合わせながらと。

そして、先ほどおっしゃいましたけど、やっぱり続けていくことが大事だよということだと思いますよね。継続をしていくということ、何事も繰り返し繰り返しやっていかないと成就しないということもございますので、根気よくやっていくことが必要だと思います。それは、学校サイドからもそうですし、家庭サイドからもそうですし、地域サイドからもそうだと思います。根気強く、いろんなことを繰り返し繰り返し。効果がないということはないと思うんですよ。それ一つで効果があるということはないけど、いろんな積み重ねをやる中で、やっぱりそれぞれに選択をされる、選択肢を広げてあげる、こういうやり方もあるんだとか、こういう方法もあるんだなということで、それをそれぞれの方々がチョイスをされながら、自分に合ったもので読書のすばらしさを見つけ出して、子供たちと一緒にやっていくというような形が取ればいいのかという感じが持ちます。

私はあまり経験がございませんので、そういうことしか言えませんが、皆さん方の意見を少しまとめさせていただくと、こういうことになるのかなという感じがいたしました。

もう少し、まだこういうことを少し話したいなと思う方がいらっしゃったらどうぞお話をいただければと思います。

萩原委員。

【萩原教育委員】

佐世保は、直木賞2人、芥川賞1人を出している風土なんですよ、土地なんですよ。それを大事にして、さっき内海委員さんが言った大人も子供も本をたくさん読む、佐世保市ですよという、何かね。そういうふうな作り方とか、そういうのを大切にしないといけないんじゃないかなと思います。

なかなか芥川賞、直木賞両方出ている土地なんてないから、それを大切にしていきたいなと思っています。

【朝長市長】

何かございませんでしょうか。

【全委員】

ありません。

【朝長市長】

教育長、最後のまとめ、何かありますか。

【西本教育長】

今日のテーマは、内海委員さんの最後の総合教育会議、いつも学校訪問にいくと、図書館のこととかお話をさせていただいて、本当にいろんなことでアドバイスをいただく、環境と図書館といったら内海委員さんということで、掃除箱から何かから見られますので、実に私たちも参考になります。

やっぱり基本的には、学力も何でもそうなんですけど、人が生きていく上で本を読んで、いろんな経験できないことを経験するというのは、大事なことだろうと私も思っています。

実際私なんかも、読んだようで読んでない本がいっぱいあるんですよ。例えば、「ガリバー旅行記」なんていうのは、絵本で読んだことはあるんだけど、実際に「ガリバー旅行記」を読み通したかと、そうでもない。それから、「巖窟王」なんていうのも映画では見るけれども、「モンテクリスト伯」とか本当に7巻くらいあるのを全部読み通したことがあるかというのは、読んでみると意外に面白い。そういうところで、やっぱり気づきが大きかなと思います。学校は子供たちに本の楽しさを教える場所、そして親御さんにも保護者にも、あの手この手を尽くして、市長がおっしゃったように王道はないので、あらゆる方法を考えながら取り組んでいかないといけないかなと思っています。

今日のテーマは大きいようで、また、取り留めないようで、実は本当に大事なテーマだったかなと私自身思っておりますので、研究を深めていきたいと思えます。ありがとうございました。

【朝長市長】

ありがとうございました。

まだまだいろんなお話も出てきそうでございますけど、今日は非常にいい、興味深いご意見をいただきまして、誠にありがとうございました。

そろそろ時間になっているようでございますので、内海委員が12月22日をもって任期満了となります。

本当にお疲れさまでした。2期8年ということでございます。

本当は、もっともっとやっていただきたいんですけど、一応2期8年というものを原則にいたしておりますので、今回、申し訳ございませんけど任期満了ということで、ご退任ということになりますけど、本当にいろんなご示唆をいただきま

して、ありがとうございました。

そしてまた、本の重要性ということにつきまして、常日頃からご自身もおっしゃっておりますし、さらに、先ほどもお話の中にございましたが、行政だけでは足りないところを民間でも補っていくことが必要じゃないかなというようなことでおっしゃっているわけですが、それを実践していただくというようなことで、たくさんの書籍のご寄附もいただきまして、本当にありがとうございました。

早岐地区の皆さん方は大変喜んでおられると思うわけですが、やはりそういうモデルになるような形で、例えば吉井地区におきましても、吉井地区の会社が、今回の洞窟ミュージアムをつくるに当たりまして、関係の書籍を譲るよというようなことで頂いたりいたしております。それぞれ地域の皆さん方が、地域の公民館なり、地域の図書室なり、あるいは学校図書室にご寄贈を頂くような、そういうような形ができれば大変素晴らしいことじゃないかなと思います。内海委員さんも非常にいいことをしていただきましたので、ぜひ今後とも、推進をしていただければと思っております。

それでは、内海委員から最後に一言ご挨拶をいただければと思いますので、よろしく願いいたします。

【内海教育長職務代理者】

それでは立って大きな声で。8年間、本当にありがとうございました。

もしインタビューを受けたら、「内海さん、教育委員どやってどうでした」と聞かれたら、「とっても勉強になりました、とっても多くの気づきをいただきました。」と。

三つ話したいと思います。

宇久に学校訪問に行きました。

振り返ってみたら、35年ぶりの宇久の訪問でした。20代、30代の頃は自動車学校の指導員として宇久島にある練習場で島の人たちと交流をし、私は指導員として教えました。その中に、また、早岐に来ていただいて、免許を取られた方、鬼塚さんであったり、山下さんであったり、顔と名前がはつきり自分の中にインプットしています。しかし、35年行ってなかったのもので、学校訪問の合間を縫って、私はその卒業生の自宅を訪問しました。残念ながら、皆さんもう亡くなっておられました。

そのときに思ったんです。自分は、40代、50代にどこにいたかという海外にばかり行っていました。ひどいときには1年に6回アメリカに行っていました。なのに、宇久には全然行ってなかった。教育委員してなかったら、最後の最後まで宇久に行ってなかったかもしれない。何と自分は、何ちゅうことをやっていたんだろうかなと、それに気づいたときに、涙が出てきました。

本当に郷土愛というのを私は教育委員になって教えていただいたような気がします。

二つ目は、ふれあい給食です。広田小学校を訪問しました。

私のテーブルに7人の子供が目の前にいて、私に質問するんです。「内海さん、どんな仕事をしていますか」。うん、よし、と思って、「近くの自動車学校の社長しているんだよ、バスに乗ったことあるかな、観光事業をやっているんだ」。

二つ目の質問。「海外に行ったことありますか」、得意です。ありとあらゆる国の話をしました。「どこの国が一番よかったですか」「うーん、タヒチ、ギリシャ、ニューヨーク」「何、それ」という話から、得意になって話しました。

「有名人に会ったことありますか」と言うから、「安倍総理」。「へえー」とみんな言ったので、「実はサウナで会ったんだよ」という話をして。本当にサウナで会ったんです。「サウナと言えば市川海老蔵とも会ったなあ」「すごい」という話から、「内海さん、朝長市長、知ってますか」と言うから、よく聞いてくれた、「私の学校の先輩でね、すごくいい市長だよ」とPRいたしました。

「どんなスポーツが好きですか」「トライアスロンやっているんだ」。

「どんな家に住んでますか、どのくらいの広さがありますか」、ちょっと小さめに「このくらい」という話をしました。

最後の質問、答えられませんでした。「内海さん、給料幾らもらってますか」、言えなかった。しかし、このときにすごく素直なストレートな質問を受けて、私は心がとても温かくなって、後日、再度このクラスを訪問して、30分ほど海外のお話をさせてもらいました。

最後の三つ目は、学びましたね。告示。まさか教育委員が告示するなんて私聞いてないなど。一番最初に「内海さん、これ告示の原稿です」と渡されたんですよ。「何ですか、これ」「卒業式のです」「卒業式に行くんですか」。「私あまり原稿持って読まない主義なんですよね」「困ります。原稿どおり読んでください」と言われたんです。原稿どおり読む、参ったなあ、しかし朝長市長は原稿読むなら必ずアドリブ入れられるなあ。それで、学校訪問をして、事前に校長先生にお会いして了解を取って、ちょっとだけアドリブを入れたいと。そのアドリブが実は本を読もうよという話。何でも見てやろうという、本と出会って私は世界一周したんだという話を最後に入れさせてもらいました。

しかし、難しかったです。原稿を読むのは難しいですね。最後、私はボイストレーナーのところに行きまして、教えていただきました。「じゃあ、内海さんまず読んでみてください」「この春の良き日に卒業の…」「駄目、駄目、駄目、駄目、全然駄目」と言われて、「そうですか」「この春の良き日に……」「駄目、春が感じられない」と言われたんです。いや、参ったと思って、いろんなトレーニングを受けました。

こういう感じなんですね。「この春の良き日に」。こういうね。「子供たちの目を見るんですよ、この辺を見るんですよ。目線、間の取り方、抑揚、そういうのを頭に入れながら原稿は読むんですよ」と言われて、それまで原稿を読む人は、原稿を読むだけだから楽だなと思っていたけど、とんでもないと気づきました。市長、本当に原稿をたくさん。私は、教育長の原稿を最近ずっと聞いていて、抑揚が違うんです。声の出し方が違うんです。

71歳になって、すごい学びをいただきました。8年間、ありがとうございます。

【朝長市長】

相変わらず、すばらしい内海節を聞かせていただきまして、ありがとうございます。

私も40年近く内海節を聞いておりまして、いつも感動を覚えております。すごいなと思います。人に聞かせる話をする人だなと思っていますし、今日は皆さん方、最後に内海委員からいいお話を聞かれたんじゃないかなと思っています。我々も非常に参考にするところがございましたので、抑揚をつけて言わないといけないと感じております。

本当にありがとうございます。どうぞ、今後とも、それぞれ事業を通して、あるいはそれぞれ社会活動を通して、また、教育問題につきましてもご意見を賜ることも多いんじゃないかと思っていますので、よろしく願い申し上げたいと思います。本当に8年間、お疲れさまでございました。

【内海教育長職務代理者】

ありがとうございました。

【朝長市長】

それでは、以上で終わっていいんでしょうか。事務局にお返しするんですかね。

【松尾総務課長】

ありがとうございました。

本日はお忙しい中お集まりいただき、誠にありがとうございました。以上をもちまして、第2回総合教育会議を終了いたします。

----- 了 -----